

□ 吹奏楽

中橋愛生

新型コロナウイルスが2023年5月8日に5類に移行したことで、様々な音楽活動はこの数年と比べると明らかに活性化した。教育機関をはじめとした公的機関が関わることが多い吹奏楽は特にその影響を受けたと言え、多くのイベントで「4年振りの本格開催」という文句がおどった。ただ、それはあくまでも演奏機会のみのお話であり、内実も2019年以前と全く同じとなったわけではない。学校部活動の中断を挟んだことにより、これまで「右肩上がり」とされていた吹奏楽人口の増加については伸び悩みが見えつつある。これには学校部活動の地域移行の本格化を進める自治体が増えてきたことの影響もあろう。学校吹奏楽の規模の縮小は、吹奏楽自体の衰退はもちろん、管打楽器人口全体の減少、ゆくゆくは音楽シーン全体の人材不足にも結びつく。それに対し、全日本吹奏楽連盟が吹奏楽コンクールの規定変更にも本格的に取り組み始める、各種吹奏楽関連団体が新しい形の吹奏楽活動の在り方を模索する、など、色々な試みが見え始めてきた。この数年、同じようなことを記している気もするが、「コロナ前に戻す」のではない新しい時代の初動として、動向を注視したい。

■国内団体の動き

国内最古の歴史を持つプロの吹奏楽団であるオオサカ・シオンwoが創立100周年を迎えた。それを記念し関係の深いアメリカの作曲家ジェームズ・バーンズを招聘しての交響曲全曲チャクルスを企画した。バーンズの来日は健康上の理由で不可能となったが、チャクルスは完遂、ライブCDが発売された。同団は12月にシカゴで開催されたミッド・ウェスト・クリニックにも参加し、そこでバーンズと共演を果たしている。他のプロ吹奏楽団の活動も5月7日に山形のプロ吹奏楽団「PRO WiND 023」が4年振りに公演を行うなどコロナ以前の規模を取り戻した感がある。現代音楽としての吹奏楽をフォーカスしている「現代創造Tokyo」が、5月17日開催の定期演奏会で初の作品公募。選出曲（徐宸瑄のユーフォニアム協奏曲「彷徨いの想い」）の楽譜が全音楽譜出版社からリリースされるというのは面白い試み。同団は9月14日に日本作曲家協議会「日本の作曲家2023第1夜」にて全曲日本初演の6作品を演奏するなどの活動も光る。シエナwoが12月1日に滋賀県立文化産業交流会館との提携を発表。シエナwoは他にも地域の文化施設との提携を進めており、今後の展開が注目されよう。ほか、7月13日には国内のプロ管弦楽団や吹奏楽団に所属する奏者で構成された「TOKYO SUPER WIND ORCHESTRA」が東儀秀樹と川井郁子をソリストに招き、秋山紀夫と田中祐子の指揮で初公演。

航空自衛隊航空中央音楽隊が3月16日に立川から府中基地へと移転。同隊は5月13日に札幌交響楽団と「札幌シンフォニックプラス2023」開催（指揮：秋山和慶）、6月にハノイに赴きベトナム防空空軍音楽隊と合同演奏、9月にスイスのアヴェンシュで行われた国際軍楽祭に参加と、活発な活動を行なった。

6月3日に名古屋芸術大学がジュニアバンドを発売。近隣の小学生・中学生を招いて指導を行うというもので、音楽大学が部活動地域移行に対して実施する試みとして注目したい。

■イベント

前述の通り、コロナ禍で中止や縮小だったイベントの復活が目立つ。2022年は中止であった浜松文化振興財団「バンド維新」

は2月26日に新曲2曲と再演6曲という新しい形で再開。3月5日に4年振り有観客となった「響宴」は13曲が演奏され企業ブースなどの復活もあり交流の場として賑わった。同じく4年振りの開催となった「ラ・フォル・ジュルネ」には5月5日にシエナwoが参加。5月19日から21日にかけての「日本吹奏楽指導者クリニック」は交流会も再開して通常開催。11月4日、いしかわ百万石文化祭「吹奏楽の祭典」には東京佼成woと各地のアマチュアバンド7団体が出演。

新しいイベントとしては6月11日に甲子園球場で高校野球の応援で注目を集める学校の吹奏楽部による「甲子園プラスバンドフェスティバル2023」が初開催。こうした再起の気運が感じられる一方、1961年から関西で続いた「3000人の吹奏楽」が5年振りに開催されるも最終回となった。

■海外との交流

日本からの海外遠征も以前の勢いを取り戻しつつある。毎年1月1日にアメリカで開催されているローズ・パレードに日本からは3年振りに朝日大学体育会吹奏楽部を中心とした岐阜県選抜グリーンバンド(ALL GIFU)が出演。3月下旬に埼玉国際音楽交流協会が高校生バンドをシンガポール演奏旅行に派遣。5月28日にはイタリアのジュリアノーヴァで行われた国際コンテストで早稲田摂陵高校ウィンドバンドが総合優勝の快挙。12月には深圳・香港国際吹奏楽祭に埼玉国際音楽交流協会が主体となったユース・バンドが、マカオ・日本バンドフェスティバルに八王子学園八王子高等学校が、それぞれ出演している。また、12月にシカゴで開催されたミッド・ウェスト・クリニックには前述オオサカ・シオンwoの他に立命館山高校も参加している。

海外遠征では台湾との交流が目立つ。10月10日の双十国慶節における祝賀式典で東京農業大第二高校が招待演奏を行なっている。12月に行われた嘉義国際吹奏楽祭には玉川学園中学、かえつ有明中・高、茨城県立大洗高校、京都両洋高校、高山西高校、習志野高校、滝川第二高校（兵庫）、山形中央高校、関東学院高校、北海道教育大学岩見沢校が出演した。

来日バンドとしては、6月上旬に作曲家ティモシー・マー率いる大学バンド「セント・オラフ・バンド」が来日ツアーを行い各地のバンドと共演したのが大きな話題。ほか、8月12日に京都コンサートホールで行われた「吹部プラス♪ジャンボリー」（共催：青少年国際交流音楽祭）に台湾の嘉義市立北興国民中学校が来日し参加、9月21日に台湾師範大学が北海道教育大学岩見沢校とジョイントコンサートをするなど、やはり台湾との関係が目立つ。また、自衛隊音楽まつり（11月16・17・18日）のためにマーレシア軍中央音楽隊が来日している。

■その他の話題

2月10日に開催された第5回アンジェロ・イングレーゼ国際吹奏楽作曲コンクールのカテゴリ A(マーチ以外の作品)で福田昌範が第一位。また、6月18日に開催された第7回アッルミエーレ国際行進曲作曲コンクール（イタリア）のコンサート・マーチ部門で特別賞に馬淵耀平、第一位および全部門総合一位に正門研一が選出される快挙。

4月29日に岐阜県吹奏楽連盟が一般社団法人化。これは部活動地域移行を見据えた変革であり、他地域が追随するかが注目される。

コロナ禍で中断していた「ニュー・サウンズ・イン・プラス」がクラウドファンディングで資金を得て再始動。初回から50年近く音源をリリースしていたEMIが撤退したのが大きい。また、6月にインターネット放送「BRラジオ」（MC：富樫鉄火）が終了し、続いてwebマガジン「バンドパワー」が閉鎖。これらは1980年から1999年まで発刊された雑誌「バンドビープル」をweb上で引き継いだものだった。